

Title	「社会科学の法則」の哲学的研究
Sub Title	
Author	武部, 与八郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.4 (1926. 4) ,p.475(65)- 511(101)
JaLC DOI	10.14991/001.19260401-0065
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260401-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

きを示すものではあるまいか。取引所を經濟社會全般の立場より考察せずして只取引所を取引所なる別世界として研究し、之より政策を編出す限り取引所は永久に經濟社會の私生兒であらう。正米市場問題の如き又此の一表現に外ならぬのである。

(註) 本篇前號所載金融資本網に續くものである。尙本文に述べたる投機證券及び其市場の説明は之を他の機會に譲り、本誌に於ける本論は之を以て完結する。

「社會科學の法則」の哲學的研究

武部 與 八 郎

最も古い希臘數學記號は所謂ヘロデアヌス記號 Herodianic signs であつた(此はヘロデアヌスに依るものである。ヘロデアヌスは紀元二百年頃のビザンチンの學者であり、此記號の記載者である)。是等の記號はアゼンスの碑文に現はること屢々である。其爲今では一般にアティック Attic と呼ばれて居る。如何なる理由に依るか不明であるが、此等の記號は後に到つて、アルファベット數字に代へられた。數字には希臘アルファベット文字が、三個の珍奇で古風な文字(η, θ, ς)並に記號 M と共に使用せられた。……次の表は希臘アルファベット數字と夫々の文字が指さす値を示す。

α	β	γ	δ	ε	ς	ζ	η	θ	ι	κ	λ	μ	ν	ξ	ο	π	ρ	σ	τ	υ	φ	χ	ψ	ω	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	200	300	400	500	600	700	800
Τ')	α	β	γ	δ	ε	ς	ζ	η	θ	ι	κ	λ	μ	ν	ξ	ο	π	ρ	σ	τ	υ	φ	χ	ψ	ω
900	1000	2000	3000																						

etc. Florian Cajori, A History of Mathematics, second edition, pp. 52, 53.

希臘人に従へば α は1を β は2を γ は3を……意味するが、 α を以て1を β を以て3を γ を以て5を……或は α を以て2を β を以て4を γ を以て6を……意味せしむる事も可能である。一般に $\alpha\beta\gamma$ ……の系列を以て任意の数の系列を意味せしめ得る。希臘アルファベット数字の代りにアラビヤ数字1234567890を用ふる場合も同じ。

何故に1は1を2は2を3は3を……意味せざるを得ぬか、意味せしめざるを得ぬか。ラッセルは一應次の如く答へる。(一)十本の指と二ツの眼と一つの鼻を有するが如く1は1を2は2を3は3を……意味せむ事を望む (Russell, Introduction to Mathematical Philosophy, p. 9.) (二)諸数は普通の対象を計算するに役立つが如きものでなければならぬ。此は次の如き事を要求する。諸数は或種の形式的特性を有するのみならず一定の意味を有せねばならぬ。此一定の意味は算數學の論理的理説に依つて定義せられる (p. 10.) (一)の見解の下に於ては1は1を2は2を3は3を……意味せざる可からざる先驗的基礎は得られぬ。(二)の見解の下に於ては(イ)實際生活が敢て要求する場合1は2を2は3を3は4を……、2は3を5は4を7は10を……、3は……、を、意味する事も可能である(ロ)数が一定不變の意味を持つため、数は悟性概念でなければならぬ(ハ)数の系列は矛盾なき體系を作らねばならぬ、矛盾なき體系を得るが如く数は定義せられねばならぬ。此場合数の自由は許されぬ(同一律及び矛盾律参照)。

認識とは主観に依る対象の認識である。認識が普遍妥當性を得る爲には、対象は客観とならねばならぬ。認識の対象は如何にして客観となるか。知るものと知られるものとの一致は認識に客観性を齎らすものと考へられる。知るものと知られるものとの一致は反覆模倣同情或は類似、相似に依つて説明せられ得る (Russell Introduction 及び Principia Mathematica に於ける Classes, Domain, Converse Domains, Fields of Relations, Similar, One-One Relations, Functions, Propositions, etc. 参照)。知られるものと一致した知る者は対象化された知る者故、認識の爲には対象化された知る者を、知る者が豫定せられねばならぬ。主観と対象とは相似、對象的対象と主観的対象とも相似である。相似なるもの組なる対象一般に對する主観は、其が対象一般に對する當の主観である限り、対象一般と相似であると考へられる。今數を相似なるもの組なる対象一般に對立する當のものであるとすれば「數とは或るものである、或る組の數に外ならざる所の或るものである」A number is anything which is the number of some class. (Russell, Introduction, p. 19) 斯くの如く定義せられた數は普遍妥當性を有つ。一定の意味を有つ。

対象一般(或る組の數)の認識の爲には是非豫定せられざるを得ぬ者と言ふ意味で、數とは或る組の數に外ならざる所の或る者である。悟性概念である。數とは或るものである、或る組の數に外ならざる所の或る者である」と言ふ數の悟性を數學上の言葉に現はせば「同じものに等しさものは相等し」。知る者と知られるものとの一致は「同じさものと」「等しさものと」その相等である。幾何學者が一般概念の中に「同じものに等しさものは相等し」を置いたは故ある事を考へられる。カントは「量とは或物に於て單位が何回定立されて居るかがそれに依て考へられることのできる物の限定である。云々」(天野貞祐氏譯、カント純粹理性批判上卷、四〇九頁。M. Müller, Kants Critique,

P. 197) M言つて居る。

認識の客觀性は「同じきものに等しき事」に表はされる。「同じきもの」は何であるか。「同じもの」を悟性概念に取れば「同じものに等しきものは相等し」を奉ずる數は具體的なる事物を説明し得ぬ、不十分である。數1は九本の指と半分の鼻と二つの口とを有する一人のひとを説明し得ぬ、不十分である。二人三人四人……より成る一個の團體を説明し得ぬ。五人の集りより成る一つの社會と七人の集りよりなる一つの社會とを區別し得ぬ。共同的なる一つの社會と利益的なる一つの社會とを區別し得ぬ。從て動的時間的歴史的なる事物を對象とする實踐的或は實證的主觀の立場からでは「同じものに等しきものは相等しからず」。後者の立場から、次の如き自覺が起る。數とは互に相似ならざる相似なる組の數に外ならざる所の或るものである。五人の集りより成る一つの社會Aと七人の集りより成る一つの社會Bとは共に一つの社會である。AはBに對して遙に大なる實勢力を有するものとすれば、Vの部分は全體よりも大である。7がより大なるは勿論である。Vの部分は全體よりも小である。斯くの如き自覺は悟性に依る自覺であるとは考へられぬ實踐理性に基く自覺である。N=7、一般にN=yを實踐理性概念としての數と言ふ。社會科學は實踐理性概念としての數を要求する。

二

生物無生物動物植物宇宙の山川草木は我々の五官に映ずる。直觀せられるものは凡て直觀の形式空間時間の制約に従ふ。自然に在るものは凡て空間時間の制約に従ふ。自然科学的實在としての物質は空間時間の制約に従ふ。物質は空間時間的存在である。

物質其者は是を知り得ぬ。先づ問題となるは物質の大小である。素朴的なる認識は外的なるものより始まる、内的反省は外的認識の後に來るが一般である。物質の大サが縦横高サの積なる體積に於て考へられる。内的反省が起る。物質の大サは體積と密度の積に考へられる。

物質の外的空間の大サから、内的時間的大サに移る。時間は動である。物質の質量は重量的質量から運動體の惰性的質量に移る。質量は $F = M \cdot A$ に於けるM即ち加速度に對する力の比例恒數に考へられる。

物質の運動を可能ならしむるものは何であるか、物質の有つエネルギーである、物質の荷ふ電氣である。然らば物質の質量はエネルギーを有する物の質量或は電磁的質量であると考へられる。

電磁的質量は不變でない。エネルギーと共に増減する。エネルギー減して物質を生じ、物質減してエネルギーが生ずる。エネルギーを減すれば質量は減する。原子量が必ずしも整数でなく多少の小數部分を有するはエネルギーの放射に依るものと考へられる。ラヂウム、トリウム、アクチニウムが崩壊して行つた最後のものは普通の鉛と同一の化學的性質を持つが原子量は異なる。

相異なる原子量を有するものも化學的には同一の物質であり得る。原子量は必ずしも物質を明かにせぬ。同一の原子番号を有するものも相異なる原子量を有し得る。從て物質は「しかじかのエネルギーを有するもの」或は「しかじかの電氣を荷ふもの」に解するが可である様に見える。

電磁的質量は速度と共に増大する。物質の質量は速度に依つて變ずるものとすれば質量は縦と横

とに於て差別を生ずる。縦質量と横質量とが考へられる。物質の質量は其の在る場所、在る可き場所に依て變ずる。然らば物質は質量に依頼するよりも寧ろ場所に依頼する。

以上より(一)物質はエネルギーを有するもの或は電氣を荷ふものである(二)物質とは夫々の場所を有するものの事である(三)エネルギーを有するもの電氣を荷ふものは時間と共に變化する。夫々の場所は時間と共に變化する物質の場であるとすれば、物質の場は時間と共に變化するエネルギー或は電氣を内含する。場に於て始めて物質は安定と恒常とを得るものの如く見ゆる。「擴がり」は萬有引力の場、電氣磁力の場、エネルギーを有するもの場である。「擴がり」を有するものは物質である。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 を基数と言ふ。基数とは外的直觀の形式の事である。10進法12進法60進法90進法……の何れを探る場合にも先づ一かたまりの「位」が必要である。基数は位取りの單位としての數〇の助を籍つて任意の數に進む。位取りの單位としての數〇を 時間〇と呼ぶ。時間〇は內的直觀の形式である。

10單位100單位1000單位……の數を主として考ふれば外的直觀の形式基数は內的直觀の形式時間に依て増大する。此場合時間は空間の上位に置かれる。基数を主として考へ $1 = \frac{10}{10} = \frac{100}{100} \dots$ $2 = \frac{20}{20} = \frac{200}{200} \dots$ $3 = \frac{30}{30} = \frac{300}{300} \dots$ であるとするれば此場合時間は空間の中に入取られて居る、空間は時間の上に置かれる。場の思想が見られる。

基数 1 2 3 4 5 6 7 8 9 を以てユークリッド空間を表はすものとすれば(A)10單位100單位1000單位
單位……の數は一般に非ユークリッド空間を表はす(B)1(=10) 2(=20) 3(=30) 4(=40) 5(=50) 6(=60) 7(=70) 8(=80) 9(=90) に考へられた基数は非ユークリッド空間を表はす(C)10單位の數に對する100單位の數は双曲線的100單位の數に對する10單位の數は橢圓的であると考へられる(D)基数は10單位の數に對しては橢圓的であるが0.1, 0.2, 0.3, 0.4, 0.5, 0.6, 0.7, 0.8, 0.9 に對しては双曲線的であると考へられる。一般に非ユークリッド空間が橢圓的であるか双曲線的であるかは相對的であると考へられる。

ミンコフスキーは物理的世界の幾何學的表現に於て、四次元世界の中に空間の三次元と時間の一次元とを數へて居る。空間の三次元に時間の一次元が加へられて居る(石原純氏著相對性原理、第四編ミンコフスキー四次元世界の双曲線的性質。に依る)。對象の直觀の形式を主觀的なる時間と對象的なる空間とに求むるは認識が主觀と對象との相對的關係であるに依る。對象の直觀の形式は對象的なるを以て純とする故、相對的なる二つの直觀の形式を純化すれば、主觀的なる直觀の形式時間は對象的なる直觀の形式空間の中に入取られる。物理學が對象的に純化せられて行くは社會學が主觀的に純化せられて行くのと共に、其本來に従ふものと考へられる。對象的に純化せられた認識の對象は結局「擴がり」を有するもの」に歸着する様に見える(出隆氏譯デカルト方法省察原理。朝永三十郎氏著デカルト。参照)。

凡てのものは原子より成る、原子は陽粒子と電子とより成る、分子或は原子の存在はブラウン運動其他に依て經驗し得られる。電子の荷電量 $e = 4.774 \times 10^{-10}$ 靜電單位、電子の質量 $m = 8.99 \times 10^{-28}$

油に計算せられる。ボール氏等の原子構造論は驚嘆に値する。然し電子其者が何であるかは知り得ぬ。(イ)電氣を荷ふものエネルギーを有するものを以て存在するものとなすは、活らき(ego)あるものを以て存在(Being)するものと爲す見解に一致するものと考へられる。活らきを先驗的に可能ならしむるは時間である。然らば物質は時間に依て可能となる(ロ)電氣を荷ふものエネルギーを有するものを以て可能的なるものとすれば、物質は數〇及び空間なる基數、十單位の數、百單位の數、千單位の數……に依つて實現せられる。(ハ)夫々の基數、1、2、3、4、5、6、7、8、9及び任意の數 $E(=10+n)$ を可能的なるもの、電氣を荷ふものエネルギーを有するもの、とすれば、前者は序數〇及び基數空間に依つて實現せられ、後者は時間〇及び十單位百單位千單位……空間に依て實現せられる。 $E(=10+n)$ は其に直接相應する基數を見出し得ぬが一般であり且つ又、基數的感性は十單位百單位千單位……の數ほどの感性を有せぬものとすれば、基數的エネルギーが連續體である場合にも十單位百單位千單位……的エネルギーは必ずしも連續體である必要はないと考へられる(量子論参照)。

ヨリ、一般的なる空間を背景とする。此背景の前で電氣を荷ふものエネルギーを有するもの、一般に可能的なるもの、は、時間に依て實現せられる。斯く考ふる時、空間の擴がりには宇宙全體の物質の多少に依ると言ふ言葉をよく理解し得る様に見える(アインシュタインの宇宙構造論参照)。

基數の系列 1 2 3 4 5 6 7 8 9 及び 10 單位 100 單位 1000 單位……の數は外的直觀の形式である。電氣を荷ふものエネルギーを有するものとしての物理學の認識の對象は凡て $E(=10+n)$ に表はされる(但し n は正負任意の數である)とすれば、エーテルは此兩者に對してアラビヤ數字 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 に現はさねばならぬ様に見える。「ロコンプヌの卵」なる數〇と「九ツの文字」に表はされねばならぬ様に見える。H. Cajon, A History of Mathematics, p. 100 参照。

(一)自然界に存するものは凡て原子より成る、原子は陽粒子と電子とより成る。(二)物質或は物理學の認識の對象は電氣を荷ふもの或はエネルギーを有するものである。(三)電氣を荷ふものエネルギーを有するものは「擴がりを有するもの」である。 $E(=10+n)$ である、「擴がりを有するもの」は其自身の中に時間〇を含む。(四)基數及び十單位百單位千單位……の數は外的直觀の形式である。(五)エーテルはアラビヤ數字 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 に現はされる。(一)(二)(三)(四)(五)は物理現象を能ふる限り數に依て理解せんとする(以上の研究は、日下部四郎太氏著物理學汎論。石原純氏の諸著書諸論文。ポアンカレ著岡谷辰治氏譯輓近の思想。竹内時男氏著量子論。助川巳之七氏著原子構造論。カント純粹理性批判第二部第二篇第三節純粹理性のあらゆる綜合的原則の體系的表現。Leipzig, New Essays concerning Human Understanding, trans. by A. G. Langley, Book II—Ideas; XXI Of Power and Freedom. Leipzig, Discours on Metaphysics. Correspondence with Arnauld. Monadology. trans. by Geo. R. Montgomery. 特^ニMonadology. 特^ニ頁4)。

Kant's Critique of Pure Reason, trans. by M. Müller: Second Division, Transcendental Dialectic, Book II, Chap. II, The Antinomy of Pure Reason, section 2, Antithetic of Pure Reason.

First Conflict of the Transcendental Ideas, pp. 344, 45.

定立。世界は時間的に始めをもつ。且つ又空間的にも制限せられて居る。

反定立。世界は時間的に始めを有せぬ。又空間的に限界を有せぬ。即ち時間的にも空間的にも共に無限である。

(定立)自然數の系列は凡て數〇の自發自展であると考へられる(數學的歸納の原理参照)。然らば自然界に存するものは凡て數〇の子孫である。此場合世界は時間的に始めを持つものと考へられる。數〇を自然的認識の主觀、(〇)1 2 3 4 5... n, n+1...の系列を自然的認識の對象、且つ認識とは主觀と對象との相對的關係に外ならぬとすれば、 $\frac{(0)12345 \dots n, n+1 \dots}{0} = \frac{(0)123456789}{0}$ である。... n, n+1... は凡て基數に約元せられ得る故 $\frac{(0)123456789}{0} = \frac{(0)123456789}{0}$ 。此場合自然界の事物は空間的にも制限せられて居る。(反定立)任意の數Bは(10+B)に表はされ得る。E(=10+B)は其自身の中に時間〇と空間なる基數とを持つ。従て自然界の事物は時間的に始めを有せぬ、又空間的に限界を有せぬ。一般に $\frac{B}{0} = \infty$ である。

Second Conflict, pp. 352, 53.

定立。世にある凡ての複合的實體は單純なる部分より成る。單純なるもの以外何者も存する事なし。或は單純なるものより構成せられたるもの以外何者も存する事なし。

反定立。世にある如何なる複合體も單純なる部分より構成せられる事なし。單純なるものと言ふが如きものは世界の何處にもなし。

(定立) 定立はライプニッツの單子論を想起せしめる。Montgomery; Leibniz, Discourse, Monadology,

(r), (2) p. 251. 河野與一氏譯ライプニッツ形而上學序説、八、九、十、其他。Langley; Leibniz, New Essays, 隨所。單純なる部分(一)數1に(二)夫々の基數1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9に(三)數10に(四)任意の數B(=10+B)に(五)其他に考へられる。(イ)自然界の事物は凡て1 2 3 4 5... n, n+1...の系列に表はされ且つ... n, n+1...は凡て數1に約元せられ得るものとすれば、世にある凡ての複合的實體は單純なる部分より成る。(ロ)自然の事物は特に數10に表はされる事がある。然るに $10 = 9 + 1 = 8 + 2 = 7 + 3 \dots = 1 \times 9 + 1$ 。従て十單位の數の始めにある數10も單純なる部分より成る。(ハ)自然界の事物は任意の數B(=10+B)に表はされ且つmは凡て基數に約元せられるものとすれば、世にある凡ての複合的實體は單純なる部分より成る。單純なるもの以外何者も存する事なし。(ニ)其他は他の機會に讓る。(反定立)(イ) $1 = \frac{2}{2} = \frac{3}{3} = \dots = \frac{10}{10} = \frac{100}{100} = \dots = \frac{0.9}{0.9} = \frac{0.8}{0.8} = \dots = \frac{0.1}{0.1} = \frac{0.01}{0.01} = \dots$, $2 = 1 + 1 = \frac{4}{2} = \frac{6}{3} = \dots = \frac{20}{10} = \frac{200}{100} = \dots = \frac{1.8}{0.9} = \frac{1.6}{0.8} = \dots = \frac{0.2}{0.1} = \frac{0.02}{0.01} = \dots$, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9に就ても同じ。故に世にある如何なる複合體も單純なる部分より構成せられる事なし。(ロ)數10及び數B(=10+B)は其自身の中に時間〇と空間なる基數とを含む。従て世にある如何なる複合體も單純なる部分より構成せられる事なし。單純なるものと言ふが如きものは世界の何處にもなし。

單子は單純なる實體であると共に複雑なる實體である。單子は單純なる部分であると共に其自身一個の小宇宙である。3:4::5:12:16:20なる比例式に於て、數3, 4, 5, 12, 16, 20を夫々單

子であるとすれば、單子4は(A) $4=1+1+1+1=2+2=3+1=1.5+2.5=3.5+.5=2.3+1.7=...$
 ・(B) $4 \wedge 12, 4 \vee 12$ 社會科學の法則参照(C) $4 = \frac{4}{1} = \frac{8}{2} = \frac{40}{10} = \frac{400}{100} = \frac{0.4}{0.1} = \frac{0.8}{0.2} = \frac{0.4}{0.1} = \frac{0.04}{0.01} = \dots$ 其他の諸數、即ち諸單子に就ても同じ。靜かに波の音に耳を澄せば雄大壯嚴な宇宙の響と共に一滴一滴の水の音がきかれる。あるものは凡て一個完全なる全一體である、又一つ一つの insensible なるものの集まりである、あるものは凡てある可き十分なる理由あつて存在する。insensible な水の一滴一滴にも温たかい同情と限りない愛とが藏つて居る。一滴一滴は一個一個の宇宙である。

Third Conflict, pp. 362, 63.

定立。自然法に一致する因果性は世界の凡ての現象が其から演繹せられる唯一の因果性でない。世界の凡ての現象を説明する爲には今一つの因果性即ち自由の因果性を認める必要がある。

反定立。自由と言ふが如きものはなし。世にある凡ての事物は全然自然の法則に従て起伏するのみ。(反定立) 基數と十單位の數とは相似である。十單位の數と百單位の數とも相似である。以下同じ。時間○は内的直觀の形式である。常にヨリ大なる位取りの數を取て基數的に理解せんとする場合、自由はない。(定立) 基數は位取りの單位としての數○の助を籍つて10以上の任意の數に進む時歪む。B(=10+π) は其自身の中に時間○と空間なる基數とを含む。數mは Perspective に認識する、實踐性に從ふ。mが如何なる空間に現はされるかは隨意である。mを如何なる悟性的數に取るかも隨意である。部分は全體よりも小である。等しい。大である。

Fourth Conflict, pp. 370, 71.

定立。絶對必然なる神は世にあつて存在す。神は世界の部分として或は原因として存在す。

反定立。世に絶對必然なる神と言ふが如きものは存せず。世界の内世界の外、何れにも存せず。

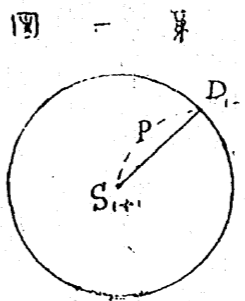
世界の原因としての神は存せず。

(定立) 1 2 3 4 5 6 7 8 9 は基數である。基數は時間○の助を籍つて10以上の任意の數に進む。基數は十單位の數 10, 20, 30, 40, 50, 60, 70, 80, 90 と相似である。基數の始めに置かれた時間○を序數○或は神と呼べば、神は絶對必然なる存在である。又自然數の系列即ち世界の、部分として或は原因として存在する。(反定立) 數10は數1と相似であるが又數1には約元せられ得ぬ或る者を持つ。數10は基數の中に存せず又外にも存せぬ。數10に含まれる○は時間○であつて序數○でない。我々は一般に數m即ち(10+π)を問題とするもの故、世に絶對必然なる神(序數○)と言ふが如きものは存せぬ。a○の値は一般にaの大小に拘らずである。o a の値は一般にaの大小に拘らず○である。

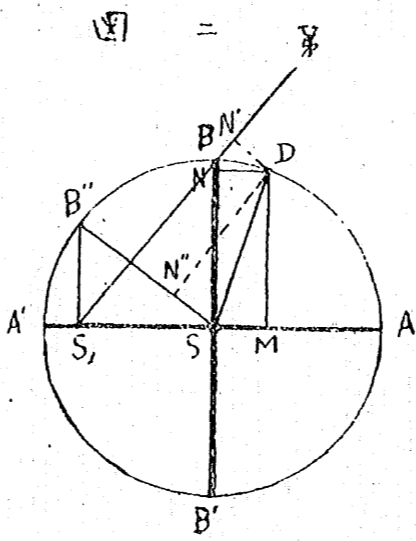
三

經濟人が假定せられ、自由競争が完全に行はれる經濟社會に於ては、一物一價の法則が成り立つ。一定時一定點に於ては一物に就て一價である。價格は需要と供給とに依て定まる。今需要の側を措く等閑にする。然らば生産者の立場から、價格は Marginal supply price 或は Marginal cost of production に依て定まるものと考へられる。限界以上にある企業家には餘分な利潤が齎される。

然し此事は直接價格に影響せぬものと考へられる。價格は限界的企業の限界的生産費に依て定まるものと推定せられる (Chapman, Outlines of Political Economy, Chap. XV. The Long Period and Supply Price)。



中心S、半徑Pなる圓を描く(第一圖)圓周上の任意の一點をDに取れば、Dは價格Pなる場合に於て供給Sと約合を保つ需要の點である。供給を陽粒子、需要を陰電子に考ふれば、中心Sは供給の陽粒子、圓周上の任意の一點Dは需要の陰電子、陰陽の電氣はPなる價格に於て約合を保つ。水素原子模型による。



に下せる垂線と交はる點をNとすれば $MDN = MDN + NDN = R + NDN$ (第二圖参照) : $MDN \angle B$ (サッケーリの鈍角の假設)。(イ) S_1 を通りAA'に垂直なる直線が圓周と交はる點をB'。Dよりの垂

供給及び需要が變化した場合を考へる。(A)(イ)SがS₁に

變れば(第二圖)SとDとの約合は崩れる。S、S₁を結ぶ直線が圓周と交はる點をA、A'。Sを通りAA'に垂直に引かれた直線が圓周と交はる點をB、B'。DよりSA、SBに下せる垂線をDM、DNとすれば、角MDNは直角である(サッケーリの直角の假設)。(ロ)Sは事實上S₁に移動したに拘らず、敢て移動せざるもの如く考へ、S₁をBに結び、S₁Bの延長がDよりS₁B

線がB'Sと交はる點をN'とすれば $MDN = MDN + NDN$ (第二圖参照) : $MDN \angle A$ (サッケーリの鋭角の假設)。(ニ)供給の點Sは需要の點の軌跡の外に出る事はないものと推定せられて居る。

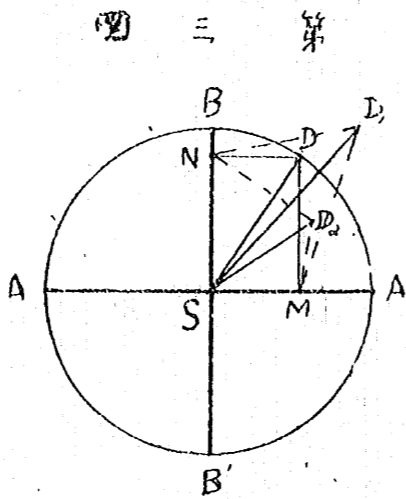
(B)需要の側の變化にはDが圓の中にある場合と外にある場合との二つがある(イ)Dが圓の外にある場合即ちD₁に變化する場合(第三圖)即ち $SD_1 \angle SD$ なる場合、角MD₁Nは鋭角である。(作圖参照)サッケーリの鈍角の假設。

(ロ)Dが圓の中にある場合即ち $SD_1 \angle SD$ なる場合角MD₁Nは鈍角である(作圖参照)サッケーリの鈍角の假設。(A)、(B)に於て、社會科學の法則の適用せられる領域が見出され得る。

消費者は如何なる欲望をも抱き得る。消費者の立場から欲望は無限であると考へられて居る。但し欲望満足に役立つ財貨は有限故事實上満足せられる欲望は有限である。消費者の欲望は

無限である連續して居る、但し生産に相對して考へられる場合、欲望は有限である斷續して居る。

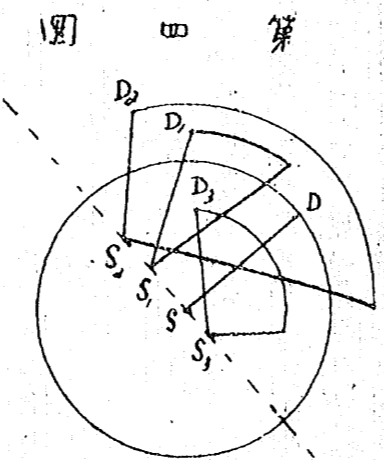
欲望は自身また有限であり斷續的である。現實市場に提供せられる財貨は一般に有限且つ斷續的である。同一種類の財貨も連續せず斷續的である。一等品二等品三等品……の絹絲がある。我々の欲望は一等品と二等品、二等品と三等品……の間の絹絲を要求する。需要の體系或は具體的欲望を十全に満足せしむるが如き商品は現實市場に存せぬ。欲望を十全に満足せしむるが如き商品を見出し得るは特別例外の場合に限る。然るに我々の持つ味覺觸覺臭覺聽覺は事實上鈍ゆる、連續して



居る無限である見え又考へられて居る欲望も實は有限且つ斷續的である。我々の感覺は機械的の商
品に機械化されて満足する。更に我々の感覺感情は機械的に生産せられた具體的商品の味はひを見
出し得ぬ程鈍である。機械的であり因襲的である。機械製商品は欲望を十全に満足せしめぬ。欲望
或は感覺感情は機械的に生産せられた具體的商品の價値を十分に味ひ得ぬ。以上より次の事が一應
言はれ得る。供給と需要機械製商品と其を味はふ感覺感情は一見した所に較べて著しく斷續的であ
る。有限であり機械的である。Marshall, Principles of Economics, Book III. On Wants and their
Satisfaction; Chapman, Outlines, Chap. III. Wants and demand. 及び特にマックス、プランクの量子
論參照。

具體的なる欲望を満足せしむる爲(イ)消費者自身が生産する。此場合消費者の意志感情情緒感覺
……は凡て生産物に具體化される、具體化されるものと想像せられる。使用に當つては、感情の
みならず意志感情感覺……の移入がある。消費するものと消費せられるものとの間に人格の一致
がある。(ロ)中世的近世的注文生産を行ふ。此場合消費者の意志感情情緒感覺……は一部分生産
物に體現せられる。(ハ)機械製商品を能ふる限り藝術化する。(ニ)消費者が機械製商品の中に飛び込
む。(ホ)機械製商品の中に具體化されて居る労働者生産者の斷片的な人格社會的人格及び人類の歴史
を發見する。(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)に就ては既に多くの價値ある努力が爲されてゐる。

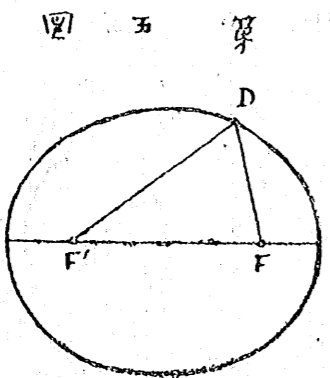
(A)素朴的に消費者自身が生産する、或は生産と消費との關係が固定的である、場合、同じもの
に等しきものは相等し。(B)分業生産機械生産斷片人格的の生産、生産と消費との關係が流動して居



る、一般に商品に體現せられてゐる斷片的諸人格がキラキラ
閃めいて居る、場合、同じものに等しきものは相等しからず。
部分は全體より小。等し。大である。第四圖は斷續せる需要
需要と供給との關係、供給相互の關係の想像圖である。
消費者が或る種の欲望を持つて居る。茶を欲望する。(一)
日本茶を欲望する、京都産静岡産……を欲望する、碾茶玉
露煎茶……を欲望する。(二)ブラックチー、ココア、ソー
ダ水……を代用する。(三)様々な酒各種の煙草を代用する。

日本茶の欲望に於て京都産を採るか静岡産を採るか、碾茶煎茶玉露の何れを採るか自由である。
是を欲望の自由度と言ふ。日本茶の代りにブラックチー、ココア、ソーダ水、酒、煙草を代用する。
是を欲望の代替性と言ふ。茶の欲望は種々なる自由度と代替性を持つ。

(一)或種の欲望満足に役立つ供給の源二ツ以上あり(二)其欲望満足
の爲に支拂はれる貨幣の額は一定である。とすれば需要と供給との關
係は圓に現はし得ぬ。圓周は歪む。楕圓とは二定點への距離の和が一
定なる點の軌跡である。第五圖に於て $ED + FD = ED' + FD'$ (一) F と F'
とを互に代替し得る二ツの財の供給の點、 D を夫に對する需要の點と
すれば、代替性を有する財に對する需要供給價格の關係は楕圓に現は



リの直角鋭角鈍角の假設を射影幾何學の助を籍つて解析幾何學の中に取入れる事、は純正數學上物理學上經濟學上興味が多い。

四

大前提 人は死す

(一) 小前提 Aは人なり

結論 故にAは死す

大前提 人は死す死せず

(二) 小前提 Aは人なり

結論 故にAは死す死せず

大前提 人は死せざるが一般であり死するは特別例外の場合に限る

(三) 小前提 A、Aは人である

結論 B、Aは特別なる人である

結論 故にAは死す

「人は死す」と言ふ命題は「人」と「死」との相對的關係を現はす知識である。現代の生物學は生死の本質限界を明かにするに不十分であると推定せられる。社會諸科學、哲學も同じ。従て「人は死す」は唯形式的に妥當な知識である。凡ての科學は生死を解決し得ぬ故「人は死す死せず」は「人は死す」に對して、ヨリ具體的な知識であるを考へられる。「人は死す死せず」は矛盾律に反する。矛盾律に反する知識は却つてヨリ眞ヨリ具體的であるように見える。「人は死す」は形式的に正しい知識であるが必ずしも眞なる知識でない。論理學は形式的に正しく又眞なる知識を問題とする。

心理學的事實は刻々に變化するもの故、Aは非Aなるが一般であり、Aなるは特別例外の場合に限る。心理學は常にヨリ具體的な知識を問題にするが必ずしも正しい知識を取扱はぬ。

生命は不斷の創造的進化である。此は直接且つ確實に經驗せられる。知識は此體驗に基て作られて行く。認識は主觀による客觀の認識である。直接確實な體驗を他く迄解析して行けば普遍妥當性を有する客觀的認識の爲には是非豫定せられざるを得ぬ程の主觀に到達する。我々は必要に應じてどこ迄も生命の體驗を解析する。然るに「各瞬間は、それ／＼一種の創造である」(金子馬治、桂井當之助兩氏譯、ベルグソン創造的進化、二二頁)「生命とは變化の流續であり、過去が現在のうちに保存蓄積されることであり、眞實の『連續』である」(五一頁)不斷の創造的進化である。従て折角解析せられた主觀は常に對象化されて止まぬ。知識は機械化される。知識は生命の殘骸のみを掴む。眞なる知識の追求者は過去の凡ての知識を疑つて止まぬ。不斷に反省する。然るに懷疑反省は不安である。「連續せざるもの、不動のもの、死せるもの、——此等のものを取扱つてゐる間だけ吾人は安易である」(二九八頁)。認識論、論理學に於ける「斯くある可し」は此安易の上に建てられる。

「AはAである」(同一律)若し「AがAであると共に非Aであるならば認識の客觀性は保てぬ」(矛盾律)。「AはAなり」に安んぜぬ。具體的な生命の眞を追求する。然らば「AはAなり、Aは非Aなり」。此場合「Aは非Aにあらず」とする矛盾律は權威を失ひ、「AはAなるか非Aなるかの何れかである」と言ふ擇一律は無力となる。従て「AはAであるか非Aであるかである、Aにもあらず

非Aにもあらずと言ふが如き事はなし(排中律)とは限らぬ。次の問題に當面する「出來得る限り眞、能ふる限りヨリ具體的にして且つ形式的に正しい思惟の法則を満足せしむるが如き知識は如何にして得られるか」。

生命の機械觀を反省する事、斯くある可しの權威を否定する事、に依て、我々の知識はヨリ一步具體的なものとなる。從て先づ、反省、否定を前景に現はす。從て「AはAにあらず」「人は死せず」。然るに正しき思惟の法則に従へば「AはAなり」「人は死す」。今、「AはAなり」を「AはAにあらず」の特別例外の場合にすれば「AはAにあらず」が一般であり、AがAなるは其の特別な場合に限る。「人は死せざるが一般であり、死するは特別例外の場合に限る」。

「AはAなり」を These 「AはAにあらず」を Antithese であるとするれば「AはAにあらず」が一般であり、AがAなるは其特別な場合に限る」は Syntheseを成すものとも考へられる。

「AはAにあらず」が一般である。然らば「AはB、C、D、E...」である。「(イ)」「AはB、C、D、E...」である。「(ロ)」「AはAである」に對してヨリ具體的である。但し(イ)は同一律矛盾律に依て基礎付けられぬ。(イ)を基礎付ける論理法則は充足律である。AはAである、AはBである、AはCである...。夫々はある可き十分なる理由あつて存在する。

不斷に増大して止まぬ具體的者を敢て形式論理の型に入れんとする時型は歪む。「AはAなり」「Aは非Aにあらず」(同一律、矛盾律)から「AはAなるか非Aなるかの何かである」「Aにもあらず非Aにもあらずと言ふが如き事を得ず」(擇一律、排中律)に到つて形式論理は歪む。此歪みを正しくすれば「Aは非Aなるが一般であり、AがAなるは特別例外の場合に限る」。正しくせられたものを更に凝視すれば「AはAである、Bである、Cである...」。あるものは凡てある可き十分なる理由あつて存在する。

「同じものに等しきものが相等しいは「同じもの」が「同じもの」である故である。從て「同じものに等しきものは相等しからず」(社會科學の法則第一部)は同一律の反省に同じ。「同じきものは非同じきものである」とすれば從て「部分は全體よりも小である。部分は全體に等し。部分は全體よりも大である」。此命題の存立を可能ならしむるものは充足律である。但し此場合「部分」が「同じもの」に考へられて居る。「同じもの」を「全體」に取る場合も同じ。形式論理は主として「AはAなり」に出發し、社會論理は主として「Aは非Aなり」に出發するものとするれば、社會科學の法則は非形式論理を表はす。

生命は不斷の創造的進化故具體的な生命の體驗は解析し盡せぬ、從て全然内容に染まぬと言ふが如き主觀はあり得ぬ。然るに内容を含む主觀は又對象であつて決して純粹の主觀でないとするれば、内在的客觀に對する當の主觀は、生命の進化と共に不斷に純化せられて止まぬ主觀でなければならぬ。斯くの如き主觀にして始めて、純粹である、又對象の認識を可能ならしむる主觀であり得る。常に純化せられて止まぬ主觀は「AはAなり」と共に「Aは非Aなり」を許す。「Aは非Aなるが一般でありAがAなるは其特別例外の場合に限る」と主張する。Aは非Aなるが一般であり、Aなるは其特別例外の場合に限るとする時、普通論理學 Logic in general, allgemeine Logik に對する先驗

論理學 Transcendental Logic の立場がよく理解せられる様に見える。カントの先驗論理學は又非形式論理學であるとも考へられる。

經驗から歸納して經驗を説明して誤りなき論理體系が作られる。斯くの如き論理體系はAがAである事を強く主張せぬ。經驗の推移と共に論理體系は更新せらる可きもの故、Aは非Aなるが一般であり、AがAなるは特別例外の場合に限る。經驗的な論理學は一般に非形式論理學であるとも考へられる。

社會は過去と隣人とを前提とするもの故、過去の時代に生存した個人は必ずしも今死せず、隣人は常に「私」の中に生きて居る。従て社會科學の立場からでは人は死せざるが一般であり死するは特別例外の場合に限る。貧富を問はず凡ての生ける人の生活は他人の生産せる資料に繋る。「私」の思想の百分中九十九は他人の思想である。斯く考ふる時「私」は「他人」の一部である。他人の特別例外な場合である。肉體的に我生く、精神的に我考ふ、故に「我在り」とは仲々言ひ得ぬ。社會學者は我を反省し同一律を疑ひヨリ大なる我に自覺せねばならぬ位置にある。以上の研究はライブニッツ、デカルト、カント、ラッセル、紀平氏、速水氏、其他の諸氏に負ふ。

(一)精神と物質とは其の本質を異にするか(二)空間と時間とは共通なる第三者に約元せられ得るか(三)認識に於ける主觀と對象との對立は如何にして agreement に到達するか。

物質は廣がり有するもの精神は廣がり有せざるものとすれば物質は空間的存在精神は時間的存在である。解析的精神を徹底せしむれば空間と時間とは共に數に約元せられねばならぬ、約元せられ得る。精神と肉體、空間と時間とは數に約元せられ得る。數とは何であるか。凡ての心理現象感覺感情情緒は凡て大腦又は感覺機官に於ける物質原子の運動に外ならぬとも考へ得られる。然らば原子は何であるか。原子とは廣がり有するもの或はエネルギーを有するものの事である。空間的時間的存在である。従て數的存在である。唯物的心理學は數量的心理學に歸せざれば止まぬ、數とは何であるか。

感覺と單純感情とは共に空間的時間的存在である、凡ての心理現象は感覺と單純感情とより成る。凡ての心理現象は意志に依て統一せられる。心理現象の統一は意志的統覺に依る。廣い意味の創造的綜合の原理は意志的統覺に外ならぬとも考へ得られる。數は、應意志的統覺である。(ヴント心理學の研究は、須藤新吉氏著ヴントの心理學。速水混氏補譯、ヴント氏心理學要領。其他に依る。我々の意識は感覺と單純感情とに依て説明し盡されはせぬ。意識は寧ろ非意志的であるとも考へられる。心理現象は凡て非意志的統覺に依て統一せられるものとすれば、數は非意志的統覺である。

非意志的統一體は實體 (Substance) と呼ばれ得る。非意志的統覺としての數は本具觀念 (Innate idea) であるとも考へられる。(ライブニッツ參照)。カントに於ける事體 (phenomena) と理體 (noumena) との區別は深い意味を有つ。非意志的統一體はタルドの模倣反對發明に依つても説明せられ得るであらう(タルドに關する知識は、風早八十二氏譯、タルドの社會學原理。米田庄太郎氏著、經濟心理學、其他。高田保馬氏著、社會學原理。等に依る)。

數は心理學的に意志的統覺であり又非意志的統覺である。主觀と對象との agreement は如何にし

て得られるか。

五

定義一、認識とは主観と対象との相對的關係のことである。

定義二、哲學するとは主観と対象とに共通なる或るものを追求することである。

定義一より、主観を *Sb.* 対象を *Ob.* に表はせば認識の一般的形式は $\frac{Ob.}{Sb.} \dots (I)$ 。凡ての物は人の立場から興味がある見逃すを得ぬ。物は人間的認識の対象である。 $\frac{Ob.}{Sb.} = \frac{\text{物的認識對象}}{\text{人間的認識對象}} \dots$

(A)。物と人とは觀念的主観の対象となる。 $\frac{Ob.}{Sb.} = \frac{\text{物的人間的認識對象}}{\text{觀念的認識對象}} \dots (B)$ 。西洋哲學

史上古代哲學は第一期物界考究の時代第二期人事研究時代第三期組織時代第四期倫理時代に分たれ得る(大西祝氏著西洋哲學史)。カントの純粹理性批判に於ける先驗辯證論 (I. Elements of Transcendentalism, Second Division) には物、人、觀念の分類を暗示する個所が多い。リッケルトに於ける主観の客観に對する三様の對立(一)精神物理的主観と其對象(二)心理學的主観と其の對象(三)認識論的主観と其對象、は物、人、觀念の分類に一致する。(H. Rickert, Der Gegenstand der Erkenntnis, 2 Auf. S. 13. 山内得立氏譯、認識の對象、第一章認識論の根本問題)。著しく心理學的ではあるがキユマンの主観客観の對立に關する見解もリッケルトの其と軌を一にする所がある(O. Külpe, Introduction to Philosophy, trans by W. B. Pillsbury and E. B. Titchner Chap. III. B, § 26)。

(1) $\frac{Sb.}{Ob.}$ 共通なるものを求める、哲學する。 $\frac{Sb.}{Ob.}$ 共通なるものを人に求めて

$\frac{Ob.(A)}{Sb.(A)} = \frac{\text{人間的認識對象}}{\text{人間的認識主観}} \dots (A')$ 。 $\frac{Sb.}{Ob.}$ に共通なるものを觀念的なるものに求めて

$\frac{Ob.}{Sb.}$ (觀念的なるもの) $\dots (B)$ 。

$\frac{Sb.}{Ob.}$ (觀念的なるもの) $\dots (B)$ 。此溝を除く爲に様々な努力が行はれた。I、(イ)物的人間的認識の対象を経験的法則に觀念化す事、此場合觀念化は先驗性を有せぬ。從て認識は普遍妥當性を有せぬ。ヒュームは因果性の範疇に經驗的演繹を行つたと傳へられる。(ロ)物的人間的認識の対象を直観の形式に觀念化す事。更に數に觀念化す事。幾何學を知らざる者は我門に入る可からず「萬物は皆數より成る」等の言葉が想ひ出される。(イ)(ロ)は対象を主とし対象の立場から物的人間的認識の対象を觀念化す。II、主観を主とし主観の立場から物的人間的認識の対象を觀念化す事。感性的なる対象を範疇に綜合統一する事。アリストートル及びカントの範疇論は有名である。III、主観と対象との同質化觀念化を全的に行ふ、動的歴史的具體的背景の前に行ふ。此方面の努力は新形而上學に屬する。フイヒテ、ヘーゲル其他の人々の努力は此方面に向けられたものと推察せられる。

帽子労働一單位の價格を假に一圓であるとする。帽子労働の生産力は社會的に増大したに拘らず帽子一個の價格は依然として五圓である、然も尙商品は價值通りに賣られるものとすれば、帽子労働一單位の價格は1圓であると共に5/4圓、5/3圓...である。部分は全體よりも小である。等しい。大である(社會科學の法則第二部)。動的時間的歴史的物事を問題とする限り、商品は價值通りに賣られざるが一般であり價值通りに賣られるは特別例外の場合に限る。悟性は帽子労働一單位の價格が一圓である事を飽く迄主張する。同じものに等しきものは相等し(社會科學の法則第一部第一則)。然るに帽子労働一單位の價格は事實上或は社會的に5/4圓、5/3圓...である。同じも

のに等しきものは相等しからず(社會科學の法則第一部第二則)。此進展して止まぬ帽子労働の價格を認める理性を實踐理性或は實證的主觀と言ふ。労働者は彼等の労働が5/4圓、5/3圓……に進展する事を歴史的或は社會的事實として知つて居る。彼等は労働の價格が5/4圓、5/3圓……に進展する事を希望し或は理想とするのではない。歴史的事實としてそうである事を知つて居る。マルクスは此間の消息をよく説明する。

個々の労働者は必ずしも社會的に大なる貢献はせぬ。然し生ける具體的な社會の進展に依て社會的労働の價格は事實上5/4圓、5/3圓……に進む。此事實上進んだ價格を把へる爲に労働者は團結する、個々の人格を一つの大きな人格に高揚する。彼等は團結の力に依て事實上の價格5/4圓、5/3圓……を確實にする。5/4圓、5/3圓……の價格に存立の根據を與へる團結した組合の力は Sufficient Reason (充足律) を爲すものと考へられる。

労働者は自己の生命の再生産に六時間の社會的必要労働を必要とする。然るに彼等は十二時間働く。資本家は六時間の餘剰労働を掠奪する(高島素之氏譯、資本論第一卷第二篇第四章(三)労働力の賣買、第三篇第七章餘剰價値の率、以下隨所參照)。此は假設である。動的歴史的具體的事實を問題とする限り、部分は全體よりも小である。等し。大である。を説明する爲に設けられた假説である。此一見非科學的な假設が眞に迫るは、充足律が暗に活らく故であるとも考へ得られる。同盟罷業、八時間労働の主張、労働保険、其他、の場合も同じ。

反濟の見込なきに負債するは悪であるか。此は中世的經濟學の問題でもり又現代社會上の問題で

ある。社會科學の法則に従て、部分は全體に等し部分は全體よりも大である。然らば一圓の資産を有するものが反濟の見込なきに5/4圓、5/3圓……の負債をなすは必ずしも悪でない。何者ば部分は全體に等しく又大である故反濟の見込なきに負債したとは言ひ得ぬ故である。社會主義者の間には斯くの如き思想が暗々の中に漲つて居る。(一)貸借關係の消滅を宗教的に或は政治的に強制する事(二)中世に於ける利子徴收の問題、は經濟哲學上興味が多い。倫理學上の問題はセンセーショナル故慎重の態度を必要とする。

以上述ぶる實例より一應次の事が言はれる。動的歴史的具體的事實を問題にする場合、任意の數 m は m であると共に $+n$ である。 n は正負任意の數である。 $0 || 0$ に於ける m を悟性概念としての m とすれば、 $0 || 0 + n$ に於ける m は實踐理性概念としての m である。又次の如くにも言ひ得られる。 $0 || m + n$ に於ける m を圖式 schemata と言ふ。 m が $+n$ に活らく時、 $+n$ を m の圖式性 schematism と言ふ。 $+n$ が特に數 10 なる時、 $0 || 0 + n$ ($|| 10$) を純粹悟性概念の圖式性と言ふ。數 10 は イ (一數故純粹悟性概念である、範疇である(ロ)其自身の中に時間を含む故感性的概念である(ハ)序數 0 と相似故理知的なる理性概念である。從て數 10 は純粹で然も一面に知性的他面に感性的である。數 10 は一方範疇と同種他方に於て現象と同種である、範疇を現象に適用する事を可能ならしむる媒介的表象である、圖式である(カント純粹理性批判、第二部第二篇第一章、純粹悟性概念の圖式性について、其他參照)。數 10 は時間 0 を含む但し時間 0 其者でない。 $0 || 0 + n$ が圖式一般である、數 10 は其特別の場合である。數 10 を敢て數 9 の繼承者と考ふる場合、純粹悟性概念の圖式性が論せられる。

Perspective view に於ける配景の中心は圖式である。P^ABは圖式性を表はす。B||B+Kに於けるmの活らさを構想力に求める事も可能である様に見える。A原點Oを自己の座標軸の上に移動せしむるは構想力或は實踐理性の活らさに依るものと考へられる。

明子労働一單位の價格が敢て1圓に定まるは、言はば、意志が自然の法則に従屬した場合であり、1圓の價格が組合其他の力 (sufficient Reason) に依て5¹4圓、5¹3圓……に定まるは、自然の法則を意志に従屬せしめた場合であると考へられる (波多野精一、宮本和吉兩氏譯、カント實踐理性批判、第一部第一書第一章、一、純粹實踐理性の演繹に就て、一三四頁參照)。労働の價格が(一)自然的に1圓に定まる、と(二)動的歴史的具體的事實として又組合其他の權威に依て5¹4圓、5¹3圓……に必然的に定まる。とは甚だしく異なる。「労働の價格は自然的に如何にして1圓に定まるか」即ち「如何にして純粹理性は對象を先天的に認識するか」と言ふ問題を主として問題にしたは正統派經濟學である。「現實に存する動的歴史的具體的なる労働の價格は如何、如何にある可さか」即ち如何にしてそれは直接に意志の、言ひ換れば對象の現實に關する理性的存在者の原因性(單に法則としてのそれ自らの格率の普遍妥當性に關する思想のみによつて)の、規定原理たり得るか」を主として問題にしたは社會主義的經濟學者である。とも言ひ得られる。(同上、一三五頁參照)。

法律上の自由平等の如何に拘らず事實上労働が資本に隷屬する時「自然に定まる」明子労働一單位の價格は一圓である、此場合意志は自然の法則に従屬する。價格は悟性概念としての價格である。完全なる自由競争の假定經濟人の假定は、純粹理性の演繹であると考へられる。二つの團體一般に二つのもの、が相對立して價格を定むる時、自然の法則は意志に従屬する、此場合價格は實踐理性概念或は意志的統覺としての價格である。此場合價格は相對性の範疇に依て定まり「自然に定まる」價格以上或は以下であるが一般である。「自然に定まる」價格に一致するは特別例外の場合に限る。自然に定まる價格以上或は以下の價格は夫々 sufficient Reason を有つ。

與へられた認識の對象が反省せられる、否定せられる、數〇となる(位取り單位としての數〇、及び時間〇參照)。實踐理性に依る認識は先づ此〇の認識から始まる。P.R. …(2)(2)は(1)に従ふ。P.R. は Practical Reason である。位取りの單位としての數10を假定する事に依て10以上の任意の數の存在が可能となる。實踐理性に對する對象の世界が展けて來る。此對象に對する實踐理性は自然數の系列に表はされる。然らば
$$\frac{0}{P.R.} \rightsquigarrow \frac{10 \sim 100 \sim 1000 \sim 10000 \sim \dots}{(0)12345 \dots n, n+1 \dots}$$
 …… (3), (3)の分子をO (Object of Practical Reason) に表はし分母を基數に約元すれば
$$\frac{10 \sim 100 \sim 1000 \sim 10000 \sim \dots}{(0)12345 \dots n, n+1 \dots} \rightsquigarrow \frac{O.P.}{(0)123456789}$$
 …… (4)。 (4)に於ける分母の諸基數は凡て數1に約元せられるものとすれば
$$\frac{O.P.}{(0)1} \dots \dots (5)。 數1を敢て數〇に約元すれば \frac{O.P.}{(0)1} \rightsquigarrow \frac{O.P.}{(0)1} \dots \dots (6)。$$
 基數は外的直觀の形式である。時間〇は内的直觀の形式である。1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 は悟性的認識の對象一般である。自然科學的認識主觀をS.N. (subject of Natural Science) に表せば自然科學的認識の一般的形式は
$$\frac{1234567890}{S.N.} \dots \dots (7)。$$
 自然科學的認識に於ける最後のもの、數〇を對象として取り、自然數の系列を主觀に取れば
$$\frac{0}{012345 \dots n, n+1 \dots}$$
 此認識形式の分母を 0 1 2 3 4

56789 に約元して $\frac{0}{0123456789}$ 、分數の分母を A に表せば $\frac{0}{A}$ 、 $\frac{0}{A}$ の値は一般に 0 である。
 $\frac{0}{A} = 0 \dots (8)$ 。對象が純粹に時間的であり且つ主觀が不定なる場合、認識の妥當性は 0 である
と考へられる。假死の状態無意識の状態衝動の瞬間等は是に依て説明される事も可能である。

對象の側に於ける 10 單位 100 單位 1000 單位... の數一般に O.P. は 123456789(0) と相似である。
後者がユークリッド空間を表はすに對して前者は非ユークリッド空間を表はす。主觀の側に於ける
自然數の系列 0 1 2 3 4 5... n+1... を能ふる限りに歸する、0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 に歸
一する。然らば 10 單位 100 單位... の數一般に非ユークリッド的なる對象を對象とする認識形
式は $\frac{O.P.}{0123456789}$ である。O.P. を 10 單位の數に表せば (10) である。然らば $\frac{O.P.}{0123456789} = \frac{1(10)}{0123456789}$
... (9)。(9) は經濟的認識の一般的形式である。

政治的認識は經濟的認識に對してヨリ人格的故、主觀の系列は能ふ限りに約元せられる。政治
的認識の對象は經濟的認識の對象が物的であるに對して人間的である。ヨリ具體的である。對象の
系列は能ふ限り大なる位に取られる、100 單位 1000 單位 10000 單位... 一般に (10)。然らば政
治的認識の一般的形式は $\frac{1(10)}{01}$... (10)。(10) に於ける分母の 0 を度外視すれば、政治的認識の
一般的形式は $\frac{1(10)}{1}$ 。此場合政治的認識の妥當性は $\sqrt{}$ 及び m と共に増大する。認識の一般的形式
Ob. Sb. に於ける數値の増大を幸福と呼び得るならば、最大多數の最大幸福は政治の一原則であり得る。
(10) は非ユークリッド的故、政治學的認識の對象には、社會科學の法則が適用せられ得る。國民の全數
10 に對して選舉權を有するもの ∞ に過ぎずとすれば $10 \parallel \infty$ 。普通選舉が行はれ 10000 人對して 1 人

の代表者が選ばれるものとすれば $10000 \parallel 1$ 。部分は全體に等し、有権者の中の 1 に依て選舉が事
實上左右せられるものとすれば $1 \parallel \infty$ 。從て $\infty \sqrt{}$ 。從て $\infty \sqrt{}$ 。500 人の代表者は事實上其の中の 50
人に依て、指導せられるものとすれば $500 \parallel 50$ 。從て $50 \sqrt{}$ 。從て $50 \sqrt{}$ 。部分は全體よ
りも大である。部分が全體よりも小なるは素よりとせられてゐる。

主觀と對象との相對的關係に於て、主觀の側を限りなく單一化し純化するは、主觀の限らない對
象化である。主觀を限りなく對象化する事、例へば純粹なる愛の如くであれば、 $\frac{1(10)}{1}$ の分母は
限りなく零に近附く。 $\lim_{1=0} \frac{1(10)}{1} = \infty$ 此場合幸福は無限大である。 ∞ なる幸福は殊に最高の善
と呼ばれ得る。

$\frac{x}{y}$ の値の増大は次の條件による。(一)分母 y は其儘分子 x が増大する(二)分子 x は其儘分母 y
が縮小する(三)分子が分母に對して相對的にヨリ増大する(四)分母が分子に對して相對的にヨリ減
少する。(一)(二)(三)(四)の活らさに於て、我々は「一切を意の儘になし得る」(波多野、宮本兩氏
譯、カント實踐理性批判、二九二頁參照) 感を懷くもの故、 $\frac{x}{y}$ の數値を増大せしむる原理は幸福
に求め得られる。分子 x の増大を可能ならしむる原理を快樂に求むれば(一)より幸福の増大は一部
快樂に繋る、分母 y の縮小を可能ならしむる原理を節慾に求むれば(二)より幸福の増大は一部
節慾に繋る。(三)(四)より、幸福は快樂と節慾との相對的關係の中にある

O.P. $\frac{012345 \dots n, n+1 \dots}{(1 \frac{x}{y})}$ に於ける分母を能ふる限りに歸する時、正義の感が得ら
れる。man without $\&$ man within に依て判斷する $\frac{x}{y}$ 、impartial spectator を得る $\frac{x}{y}$ は、

O.P. $\frac{0.12345 \dots n, n+1 \dots}{1}$ に於ける分母を能ふる限り一に歸す事であると考へられる。是は正義の感に一致する (A. Smith, The Theory of Moral Sentiments, p. 220, pp. 230, 31. 其他參照) 夜盜無頼の徒の黨と雖も x/y に於ける分母を任意の基数に約元する。 $\frac{O.P.}{9}, \frac{O.P.}{8}, \frac{O.P.}{7}, \dots, \frac{O.P.}{1}$ を國家團體と言ふ。よく正義の感に一致する。正義は凡ゆる主觀を1に歸するを以て足れりとはせぬ。 $0.1, 0.01, 0.001 \dots$ は1と相似である。 O.P. $\frac{0.12345 \dots n, n+1 \dots}{y}$ ($\frac{x}{y}$) に於ける分母が限りなく0

に近く約元せられる時、政治的正義は實現する。 $\frac{O.P.}{0} = \infty$ は最高の善の意識に一致する。

x/y に於ける分母 y が特に0なる時 x/y の數値は一般に、分子 x の大小に拘らず ∞ である。人の理想は實現せられる。 $\lim_{y=0} \frac{x}{y} = \infty$ に於ける數0は特に神と呼ばれ得る。神は最高善の意識の中にある。或は最高善の意識を可能ならしめる。主觀と對象との相對的關係は $x/y, x/y$ の値を V と置けば $\frac{x}{y} = V$ は意識と呼ばれ得る。我々の認識は意識の及ぶ範圍に限る。

x/y に於ける y が特に0なる時、主觀は完全に對象化されて居る、或は主觀は完全に對象から解放せられて居る。此場合 x/y の値は x の大サの如何に拘らず一般に ∞ である。 $\lim_{y=0} \frac{x}{y} = \infty$ に於ける分子の x は特に命題的函數に表はされ得る (命題的函數に就ては、十四年八月號所載の拙稿經濟

價值説の體系一三三頁 Russell, Introduction, Chap. 15. Propositional Function. Poincaré, The Foundations of Science, trans. by Halsted; Science and Method, Book II. chap. V. The Latest Efforts of the Logicians, VI. Zigzag Theory and No-class Theory. 山本修氏譯科學の方法一五五、六、七

頁及び特に Kant's Critique of Judgment, trans. by J. B. Bernard, § 59, Of Beauty as the Symbol of Morality. 參照)。命題的函數 $y=f(x)$ に於て、我々は x に任意の數値を代入し得る。命題的函數とは其の諸値が諸命題なる一函數の事である。命題的函數は凡ての主觀を其自身の中に含んでゐると共に凡ての主觀から解放せられてゐる。命題的函數 $y=f(x)$ の x に任意の數値を代入する時、美的判斷は成る。認識とは主觀と對象との相對的關係の事である x/y 。從て $y=f(x)$ 。又命題的函數 $y=f(x)$ は $\lim_{y=0} \frac{x}{y} = \infty$ に於ける分子の x である。從て命題的函數 $y=f(x)$ は悟性的認識と實踐理性的認識との冠石 Coping-stone である。命題的函數は美しく明るく照され舞臺である。觀る人の席は暗い。木や石や土で造られた箱の中で觀客は恰も凡ての利害打算から解放せられて居る様に見える彼等は恰も華かな舞臺の中に溶け込んで居るものの如く見ゆる。

認識とは主觀と對象との相對的關係の事である x/y の値を V に置けば $\frac{x}{y} = V$ は意識を表明する。 V が算出せられる爲には x と y とは同質且つ y は與へられた一定量でなければならぬ。 y は特殊なるものに取られる、具體的なる生命の歴史は V に展開せられて行く。 x/y に於ける分母の y を特に經濟的主觀 (S.E.) に取れば $\frac{x}{S.E.} = V_1$ は經濟的史觀である。 y を政治的主觀、物的主觀、人間の主觀に取る場合は是に準ずる。 $\frac{x}{0} = \infty$ 此は $\lim_{y=0} \frac{x}{y} = \infty$ に一致する。此場合歴史は生命の藝術であり、人間理想の實現である。

社會學は x/y を對象とする。主觀と對象との相對的關係を對象とする。社會學の認識主觀は對

